



# SPACE

No.32

日本臨床心理身体運動学会会報第 32 号 2015 年 3 月 27 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

---

## 第 17 回大会を終えて

坂中尚哉（関西国際大学）

2015 年明け、数日が経った今、この原稿を書きはじめています。およそ 1 ヶ月前の出来ごとではありますが、何か遠い昔のことも感じ、大会までの準備や大会期間中のあまたの思い出は霧にかかり、うまく思い出すことができません。

ただ、終えた今、「楽しかった」という気持が実感として残っています。

そして学会大会の運営を通して、たくさんの方々からの協力が得られました。なかでも、多くの先生から個別にいただいたお手紙やメール、電話などを通して激励いただき、言葉にはならない何かを学び、力をもらったように思っています。この場をお借りし、御礼申し上げます。

さて、大会テーマは「創（きず）が劈（ひら）く世界の物語」でありました。大会プログラムにも簡単に触れましたが、僕の心理学への扉は、1995 年（阪神大震災）の大学アスリート時の怪我の体験が導いてくれたものでもあり、大会をお引き受けする際、漠然とながら「きず」をテーマにしたいと思っていました。そこで、特別講演には、アーサークラインマンの訳書（病いの語りなど）でも著名な東京武蔵野病院の江口重幸先生にご登壇いただきました。

講演では、傷の治療的意味を巡ってシャルコーやジャネなどの 19 世紀を代表する精神医学の巨匠たちの足跡を辿りながら、なかでも「劈（ひら）いた傷には、それ自体で自ら癒えてゆく治癒力がある」としながらも、それに伴って儀礼や自己損傷・出血に見られるように「傷」が発生する「きず（創＝傷）の二重性」に興味をそそられました。そしてこうした領域を深堀するには、ナラティブ（物語り）がそのツールとなること、これからの臨床—研究における確かな指針となりました。

今大会を振り返れば、RTD(ラウンドテーブルディスカッション)を新たに取り入れたことや懇親会でのサンタコスチュームによる AKB ダンスを共有できたことなど、緩やかに思い出が浮かんできますが、やはり十分に言葉に言い表せず、断片的な想起にとどまってしまいます。

折につけ、学会大会をお引き受けするような身ではないのでは、と繰り返し自問す

ることも多かった1年でしたが、準備期間を通して大会を影で支えていただきました実行委員の先生方や協力学生、そして大会に参加いただいた学会員の皆さまへ心より御礼申し上げます。無事に18大会（大阪府立大学）へタスキをつなげられました。そしてようやく僕にとってのスタートが切れそうです。

## 大会参加記

小谷克彦（北海道教育大学）

尼崎の関西国際大学にて開催されました本学会第17回大会に参加致しました。今回の学会大会では、私は一般研究発表にて『「自信がない」と繰り返す女子学生アスリートに対する心理サポート』と題した研究を発表させて頂きました。現在の職場に就いてから4年が経ち、「この場で、今の自分のできることを考えよう」と思い発表させて頂くことにしました。しかしながら、発表の準備をしている間、自分がやってきたことに対して、「これは心理サポートと言えるのか？」「何をしていたんだろうか？」といった問いが私の頭の中を巡りまわっていました。そして、「発表を取り消したい」気持ちと「今、やっていることを振り返ろう」という気持ちがいつも対決している状態が前日の飛行機の中まで続いていました。尼崎の地に着いた時には覚悟を決めていましたが、なんとも言えぬ気持ちが残ったまま発表当日を迎えました。

大会1日目の午前、米丸先生（国立スポーツ科学センター）の事例研究発表1『「過度に自分を追い込んでしまう」アスリートとの面接』を聴かせて頂きました。特に、印象に残っているのは、風景構成法に描かれるスティックフィギュアの意味についての議論、アスリートの「遊び」についての議論でした（「遊び」について実際にフロアで議論されたがどうか記憶が曖昧なのですが）。スティックフィギュアでの表現や「遊び」が実際のプレイでどのように表現されていたのかについて興味が湧きましたが、それと同時に、守秘義務を守りつつアスリートのプレイを文章化することの難しさを改めて考えさせられました。米丸先生が当日発表された記述以上に様々な動きを米丸先生の前でアスリートは語っていたと思います。それを研究として議論できる段階までもっていくためには、どうしたらいいのか？アスリートの動きやその動きの背景にある意味についての理解をさらに深めなければいけないと思いました。

午後は私の研究発表直前で落ち着かない中、上向先生（武蔵大学）の一般研究発表1『日本人プロサッカー選手の海外移籍に関する研究』を聴かせて頂きました。私も海外での生活に適応することは難しいと思っていましたので、どのように適応しているのかに興味を持っていました。しかし、実際は、海外での生活に不安はあまりないという答えが多かったとのことでした。このことには驚きました。海外での生活に適応できるかどうかは、海外で成功をおさめようとするアスリートにとっては些細な問題なのか、トップアスリートになり得る心性について考えさせられました。

そして、いよいよ私の発表の出番になりました。発表している時間では、実に色々なことを考えさせられました。原稿を読み上げている時でさえ、何回も読み直した内

容であるにもかかわらず、新たな発見がありましたが、フロアの先生方からは、私が気づいていなかったこと、おろそかにしていたことなどについてご指摘を頂きました。私自身、今いる環境で精一杯のことをやってきたつもりではいましたが、その「今いる環境」を言い訳にして、できること、やらなければいけないことをやっていないということに気づかされました。そしてサポートにおいて基本的なことの大切さを改めて考えさせられました。指定討論者の前田先生（常葉大学大学院）や座長の土屋先生（大阪体育大学）には、打ち拉がれている私に対して暖かいコメントを頂いたばかりか、今後の取り組みに一筋の光を与えてくださるコメントを頂きました。今回の発表で頂いた様々なご指摘を大切に、今一度、自分の取り組みを振り返り、精進していきたいと思います。しかし、後から考えると、発表後はまだ振り返るスタートラインにも立てていなかったと思います。その事を考えさせられる2日目でした。

2日目の午前は、中込先生（筑波大学）のワークショップ『アスリートが来談するとき』に参加させて頂きました。振り返ることをテーマにして今大会に参加した私にとって、大学院時代に指導を仰いだ中込先生のお話を聴くことは、現在私が見失っていることを見つめ直す貴重な時間となりました。また、風景構成法に描かれる道についてのお話があり、今、私が描くならどのような道になるのだろうかと思いを巡らせました。

午後は、特別講演ならびにシンポジウムを拝聴しました。「傷」と「創」、そして「開」と「劈」の言葉の意味の違いから始まり、実に様々な「きず」についての話題にひろがっていきました。江口先生（東京武蔵野病院）が特別講演にて様々な「きず」にまつわる画像を紹介して下さったのですが、正直なところ私はそういった画像が苦手でした。また、私には様々な「きず」の話が、前日の発表と重なって聞こえていました。そのためか、特別講演当初は、変な感情が邪魔をして「きず」について考えることができませんでした。しかし、江口先生をはじめ、話題提供者、指定討論者の先生方のお話を聴いているうちに、そういった変な感情がいつの間にか消えていました。そして、前日の発表を一つの「きず」として、これまでの自分に向き合っていくことが必要なのではないかと考えるようになっていました。帰路の飛行機の時間のため、残念ながらディスカッションの前で退室してしまいましたが、短時間でも私にとって有意義な時間でした。

今回の学会大会では、「今、やっていることを振り返ろう」という思いで参加させて頂きました。しかし、実際は振り返るところか、スタートラインに立つための準備をさせて頂いた時間であったと思います。今回の学会大会で頂いた様々な刺激、体験を大切に、スタートラインに立つことで満足することなく、今後も精進していきたいと思います。

## 編集後記

SPACE 第 32 号をお届けします。本号では関西国際大学で開催された第 17 回学会大会について大会実行委員長の坂中先生と、参加し研究発表された小谷先生に書いていただきました。今年の学会もまたフル稼働で学会参加し、様々なことを感じ、考えさせられました。日々の活動に活かしていきたいと考えています。来年の学会大会は大阪府立大学で開催されます。講演、シンポジウム、研究発表と盛りだくさんのプログラムがあり、期待したいと思っています。

会報は、会員相互の利益になるような情報等を掲載していと思っています。会員の皆さまからの投稿をお待ちしています。(鈴木)

<b>SPACE</b>	<b>No. 32</b>
<b>日本臨床心理身体運動学会 会報第 32 号</b>	
<b>2015 年 3 月 26 日発行</b>	
<b>日本臨床心理身体運動学会</b>	
<b>会 長 山中康裕</b>	
<b>編集責任 鈴木 壯</b>	
<b>事務局</b>	<b>〒541-0047</b>
<b>大阪府中央区淡路町 4-3-6 新元社内</b>	
<b>TEL : 06-6221-2600</b>	
<b>FAX : 06-6221-2611</b>	
<b>E-mail : office@rinsinsin.jp</b>	